

〔書評〕

国立国語研究所著 国立国語研究所報告84

## 『方言の諸相「日本語地図」検証調査報告書』

大橋勝男

一

国立国語研究所の『日本語地図』の編纂活動及びその著書全六巻（一九五五（昭三十）準備調査着手〜一九七三（昭四八）刊了）は、日本の昭和三十年代以後の国語学・方言学の流れに大きな影響を与えてきた。とりわけ、地域言語への注目を大いに喚起し、地域言語研究の国語学における位置を確固たらしめるのに寄与した意義は、大きい。

同所は、同地図の編纂という大目標の許に、自ら模索し、自ら工夫し試し確かめつつ、そのいとなみの中で成長し発展していった。それに携る研究員諸氏も、その過程で、学的に成長深化していったように見受けられる。そのいとなみの主要なものに、一つは、いわゆる糸魚川言語調査（一九五七（昭三二）着手）、そしてこのたび刊行を見た『国立国語研究所報告84 方言の諸相「日本語地図」検証調査報告』（一九八五（昭六〇）刊）における八つの研究（一九六五（昭四〇）〜一九七三（昭四八））がある。これらは、『日本語地図』の作成のためという手段的、従属的性格のものとしてなされたものではあつた。同時に、それ自身独立した研究、発展的研究として、自

立的意義をも獲得するに至っている。

その八つの検証調査研究とは、『言語地図作成の仕事と並行して『日本語地図』の性格を明らかにするために、様々な視点から小規模な調査を実施した。それらは、いずれも『日本語地図』で調査の対象とした言語層とその周辺の層との関連を見るための調査であり、これらは、『日本語地図の検証調査』として位置づけられた（同報告書84 p.2）というものである。

『日本語地図』の検証ということは、結局は、方言地理学とか言語地理学とか言われる学問的方法を検証することに自ら通じる。当報告書は、その意味において、単に『日本語地図』のためというにとどまらず、さらに深い重要な意味を有し、意義を有すると言える。方言そのもののありようは一つであっても、それをとらえる方法が異なれば、そのありようも見え方が違ってくる。この検証調査は、その点を良心的に確かめようとしている。『日本語地図』のための方法を謙虚に自ら疑い、第三者の目で厳しく確かめようとしている姿勢は、真摯である。そこには、単なる西洋流の言語地理学の方法原理の、日本語方言へのひき当てという安易さに流れることなく、自らの対象に即して方法を求めていこうとする主体的・創

造的な態度がある。そのようなひたむきな感慨がみとめられる。だからこそ、『日本語地図』の大事業が、日本の国語学・方言学の一つの流れを作り、また担当研究員を育みもしたのに違いない。

## 二

では、当報告では、『日本語地図』についての何が検証されたのか。そして、それはどのような意義を有するのか。それを明らかにすることは、『日本語地図』の読者、活用者のためにも、また日本方言地理学の建設のためにも、きわめて重要なことである。このたびの当著は、八つの個々独立した調査結果の報告の列挙という体裁をとっているが、今後さらに、この見地からの統合集約がなされるならば、当研究の価値はいつそう高いものとなる。

方言学を、一地点方言を絶対的に見つめていく研究と複数地点方言を相対的に見比べていく研究とに大別するならば、絶対的研究の極に記述的研究が、相対的研究の極に方言地理学が位置しようか。この絶対的・相対的見方の相即することが方言学の願いであり、またそれを願うところに悩みや工夫が生じている。いずれにせよ、要は、それは、方言の生存のありようの真実に直到しようとする願いであり、いとなみである。国研の当報告に盛られている各検証調査研究も、まさにそのような願いに基づきいとなみだったとみられる。

方言地理学は、確かに広域方言を鳥瞰しようという利点を有する。しかし、そのためには、比較を旨とするための条件統一が必須となる。それは、例えば次の如きものである。

1 調査対象者——性・年齢・在外歴・学歴・職業・家格・身体・

人数

2 調査事項——言語部面(使用場面を含む)・項目配列

3 調査方法——質問法・質問文・調査場場・記録法

4 調査地点

5 調査時期

6 調査者——質・人数

方言それ自体は、ただ自然に、各地点の人々の生活に寄り添いつつ、生存している全的存在である。しかるに、方言地理学は、それを観察しようとするに、右記のような条件のフィルターを通して見なければならぬ。条件を統一するということは、自然言語・統体的言語の一部をとりたて、他の多くを捨てることを意味する。方言地理学的方法の不安と悩みとが、そこから生じることになる。評者大橋も、関東地方域方言についての方言地理学的調査研究に従う中で、常に心にかかる不安とどこかしさと悩みとを払拭しきれないものがあつたが、それは、まさにその点であつた。国研担当者諸氏が、その点について不安ないしは問題意識を感じ、検証調査に赴くことになつたのは、至極自然なことである。ましてや、本格的な方言地理学的研究の気運や成果の未だしい往時においては、なおさらである。

例えば、調査対象者を一地点一名に限定し、その人の回答方言を以つて当地点方言を代表させるとか、調査項目を地域差の出そうなものに限定するとか、広域調査の場合、十数キロメートル四方毎に一地点をとつて、そのあたりの諸地点方言を代表させるとか、調査者が複数で調査地点を分担し合うとか……。

これらの限定や排除が、言語の実際のありようを円満十全に把え

るのにどの程度影響するものなのかどうか。もし、それが損われるとしたら、言語のどのような部面であり、扱えた言語は、どのような性格を有するものなのか。そのようなことは、いずれ誰かによって検証確認されねばならないはずのものであったのである。

その意味で、これにかくも真向から取り組み、ともかくにも検証の結果を得たことは大きな快挙であり、単に『日本語地図』のためにとどまらず、方言地理学の学問方法、学問原理の見なおしとさらなる創造充実のために、画期的な意義を有すると言えるのである。

### 三

さて、当報告で扱われた八つの検証調査は、どのような点に關してであったか。それを、各項の題名によって見ると、次の如くである（便宜上、各項に掲載順に従い通し番号を付す）。

- ①被調査者の人数・条件、質問方法による差（高知市調査）
  - ②一地点における年齢差と地理的分布（宇都宮市調査）
  - ③地域差と年齢差（新潟県糸魚川市早川谷調査）
  - ④地域差と場面差（熊本県球磨川沿岸地域調査）
  - ⑤地域差と世代差と場面差（八丈島調査）
  - ⑥言語地図における意味の問題（中国山地と瀬戸内海での調査）
  - ⑦同一被調査者の10年後の再調査（九州各地における調査）
  - ⑧語アクセントの地域差と個人差（南予地方での事例研究）
- これらは、大きく⑧とそれ以外とに分けられる。⑦以前の諸項が、直接的な『日本語地図』のための検証調査であり、⑧は、いわば展覧的・試験的な調査である。⑦以前の中では、⑥が語義に着目し

ていて異なった性格を有する。残るは、①③及び⑦が、共通に、調査対象者の条件について見ている（——年齢・人数・性・在外歴。④⑤ではことばの使用場面について見ている。なお、①では質問方法にも、③では調査地点にも、⑦は、調査時期にも注目している。

先に評者が列記した六つの条件統一事項のうち、「6 調査者——質・人数」を除くほぼ全項にわたっていることになる。壮観である。

調査者の問題も等閑視できない、ぜひ検証の必要な事項に違いない（例えば、音声事象の聞きとりについてなど、さつそくに）。特に『日本語地図』のように大規模な協同分担調査に成るものにおいては、なおさらである。（既に、当言語地図に關して、調査者に関わると推察される問題のなくはないことが、仄聞もされている。色々当たり障りが予想されるから、この検証に真向から取り組むことには、躊躇があつたかもしれない。また、検証上の方法的・技術的な難しさがあつたかもしれない。しかし、『日本語地図』の正しい解釈のためにも、それは、いずれは検証されねばなるまい。

### 三

では、八つの検証報告の個々について見ていこう。

①においては、性・年齢・在外歴という被調査者の条件が検討され、年齢√在外歴√性という順で差が現れること、年齢差の大きい項目に音声項目、近代生活では密接な関係のなくなった動植物などがあるとの結果を得た。評者にとり、この調査で、意外でありまた興味深かったのは、在外歴の条件に関する結果である。『日本語地図』の被調査者の在外歴条件に合わない被調査者（在外年数超過者）の方が適合者よりも方言特有語をより多く回答するというのであ

る。担当執筆者は、超過者が「県内部部の出身者ということの説明できそうである。」と記している。単にそれだけの理由によるのかどうか。何か超過者に共通の心理的要因などは働いていないのかどうか。この傾向は、他域の場合にも一般的にみとめられる傾向なのかいなか。興味が次々とふくらむ。いずれにせよ、適者と不適者との間にかくも差がみとめられたということは、方言地理学上、在外年数を極力少な目限定統一することが重要であることを、実証的に教唆している。

他方、当論では、質問方法についても貴重な検証をしている。「謎々式」と「誘導式」と「翻訳式」とによる回答の出方の違いを、理解語・使用語・不知語と、きめ細かに分析して検証しているのは周到である。これにより、各質問方法の特性、限界等がかなり明らかになった。なかんずく、「誘導式」の有効性の実証が光る(ただし、「誘導」という術語は、なお練る必要がある。「誘導」は、むしろあつてはなるまい。ただ「確認」があるばかりではないか。「提示式」とか「事象確認式」とか……。さらに正鵠を得る術語に改訂しないと、後進を毒するおそれもある)。この三方式の特性を生かした有機的使用の有効性・重要性が、深く学ばれるのである。この成果が今後の方言地理学的調査に大きな指針を与えることは、間違いない。研究資料の真正周密な把捉こそ学問研究の最基本であるとすれば、資料把捉の方法に関するこの検証の意義は、きわめて大きいものがある。今後とも、方言実態の把捉法に関する吟味と理想追究とは、一に方言地理学の領野にとどまらず、方言研究全般にわたり、いよいよ厳格強力に推進されていく必要がある。

②と③とは、性格的に似ている。②は、地点を一つに限って、男

女各々につき年層を極く稠密にとり、縦に言語の姿を見ようとした。③は、糸魚川市早川谷という、山奥から日本海に注ぐ一筋筋に連続的に地点をとり、かつ、各地点平均六・五歳刻みに男女を問わず人をとり、縦横に言語の姿を見ようとした。仮りに、①を方言年層学、②を方言年層地理学と称してみる。すると、②を単純にしたのが、いわゆる方言地理学であるということになるか。最近①の方法も②的方法も盛んに用いられているが、当検証調査着手の往時(昭和四十年代初期)としては、それらは、勝れた方法開拓であつたと言える。②でさらに勝れるのは、方言事象提示確認法を併用すると共に、回答事象について逐一回答者の意識を(1)知っている(しかし使わない)、(2)昔使つた(今は使わない)、(3)昔も今も使う、(4)今使う(昔は使わない)、(5)知らない、のように細密に確認して表示し、それと、「日本語地図」における当地点周辺の当項方言事象分布との相関を見ていることである。これにより、年層上に現れた使用状況の分布に、周辺の地理上に現れた事象分布状況が微妙に反映していることが、具体的に明らかになった。この方法は、方言事象の存否・生存・盛衰等を、根こそぎ、ひだ深く把えるのにかなり有効なものであるらしい、とうかがわれる。

③は、先述したような方法開発的意義に加え、それによつて把えて見せた実態そのものの価値・意義が大きい。我々の漠然とした見込みでは、下流の方言事象は新しく、上流谷奥のそれは古い、下から上へ言語は流れる、と考えていよう。しかるに、当報告を見ると、実際は、そんななまやさしいものではなく、思いもかけぬ多彩な、複雑な諸事実のあることがわかる。成心なき事実直視、一にも二にも実態を調べること、手足を惜しまぬことの重要性を深く教えられ

るのである。

④と⑤は、ことばの使用場面に着目した。④はそれを地域性ととの関わりで見、⑤はそれに年層の視点も加えた。方言生活は、通常、特定場面で、相手と直接やりとりされる。場面への着目・検証は必須のことである。その検証対象を列島周辺の熊本と離島の八丈島とに求めたことは、有効だった。特に八丈島方言は、相手に応じ言い分ける待遇表現体系が細密厳格に出来ている言語であり、加えて、島内五集落の方言差が著しく、しかも特有の確固たる独立言語世界を形成している。その意味では、これら語彙項目・文法項目にとどまらず、敬卑表現項目も取り扱おうと、検証の実は、いっそう鮮明なものとなったかもしれない(もともと、『日本語地図』は、文法や表現法は取り扱っていないから、当図の検証を意図した調査が語彙中心であるのは、当然である)。

両調査で一つ注目される成果は、方言と共通語の使い分けに関するものである。④では、下位場面で方言形、上位場面で共通語形が用いられることを指摘する一方、上位場面では京都・大阪方面の方言形の用いられる場合のあること、近隣文化中心地の方言が、周辺地点の上位場面で用いられる場合のあることを指摘した。ここには、全国共通語・地方共通語・方言という三重言語の、地域言語生活上におけるきれいな分担生息の事態がある。貴重な報告である。⑤では、島外からの人には共通語形を用いる傾向のあること、老中年層から子への話しかけに際しては、共通語形を用いようとする傾向のあること、若年層の文法事象に、方言形と共通語形との混交形の使用が目につくことを指摘した。これらは、地域言語なるものが、いわゆる方言と共通語(——全国共通語・地方共通語)との有機的総合体

であること、それらが生活に即応して微妙に使い分けられているということ、これを如実に物語っており、いかにも示唆深い。また、これにより、国の東西における共通語意識の差、人々にとつての共通語の意義の差を深く考えさせられる。こういった分野の研究も、今後は、社会言語学の興隆とも相俟っていっそう推進されていく必要がある。なお④の京阪のことばを上位場面で用いるという現象と、⑤の方言と共通語との混交形を用いるという現象とは、共に全国共通語への過渡的一階梯の、相見互いの二相とも解されるか。

⑦は、同一被調査者に同一調査者が同一の調査票で、十年後に再調査をし、第一回目の結果と比較した。この検証は、『日本語地図』の生命とも言うべき、方言事象把握そのことにかかわるものであつて、きわめて重要である。ただし、「まとめ」の1)〜3)の諸項のような調査に関わることがらの検証は、本当は、第一回目調査着手に先立って、ないしは着手直後に十分に行われるべき性格のものである。ないしは、そうである程、より明確な検証となるはずのものである。なぜなら、その結果の如何によつては、調査項目を改めるとか、質問文を練り直すとか、項目配列順位を再検討するとか、時に、調査者を交代するとか、被調査者の条件を変えるとか等々のことが必要となるはずだからであり、また、十年という時間が往時とは異なる多様な不確定条件を諸面にわたつて付加するからである。そのため、これは、調査上の誤差の検証というより、同一人の言語が十年間でどのように変わったか、ということの検証としてこそふさわしい性格のものとなつてしまった。これは、まさにそのようなものとしてこそ、誠に高い価値と意義とを有すると見るべきものである。したがつて、第一・二回結果について、当著は平均一致率六四％

というのを出しているが、これは、むしろ、十年間での不変化率と見るべきであり、残る三四％は、十年間での変化率プラス調査上の要因等による相違率と見るべきである。しかるに、当著では、この三四％の中から、音声的変異と共通語形の出入りの相違率を差し引き、残る俚言形の出入りのパーセント一三％を調査上の「誤差」と見る。そして、「現実には、この一三％の誤差はいわば調査の宿命であつて、われわれはこのような誤差が存在することを前提として言語地図を見るべきであると思う。」としている。ここには、十年間という時間への視点が欠落している。そののみか、音声的差異・共通語形の出入りいづれにすらも、原則的には、十年間における変化に起因する要素が含まれると考えるべきである。宿命論は、するのなら、その考慮後でなければなるまい。一三％でも、調査精度は「宿命」とされる程度に高いものとするならば、右の考慮により、いわゆる本当の誤差は、更にパーセントがかなり下がると予想されるから、『日本語地図』の調査の信頼度はますます高いということになつていこう。それを検証したことは、当図に根底的な保障を与えたことになり、その意義は、この上なく大きい。

⑥は、語義と語形との対応関係、それと地理性との相関を検証しようとした。その意図は、誠に斬新であり、意欲的である。しかし、そのための意義枠の設定の仕方に、方言生活に徴してあまりに非現実的なものがある。「風呂敷包みを棒にさして担ぐ」「挨拶箱を担ぐ」「駕籠を一人で担ぐ」などは、その著例である。いかに実験とはいへ、方法のために対象の方が追従させられていなければ幸いである。

当調査により、方言事象の、地図上の分布という表層と、その語の内包する意味領野の広がりという深層との相関、近接意味領野に

対応する語形の地域的相関という微妙な問題が、ひだ深く掘り下げられた。これが、方言地理学に意味論、語彙体系論を積極的に取り込み、内面化していく刺激となるならば、当検証の先駆的・啓発的意義は高いと言える。

⑧は、『日本語地図』が取り扱っていない語アクセントについて、その体系の地理性を見ようとした。これは、いわゆる方言地理学といわゆる比較方言学とを統合したような性格の研究として、いかにも成功している実践である。いわゆる構造言語学の典型的実践例とも言える。対象方言の設定も、複雑な地域差を示す南予域を取り上げた点、至当であつた。調査は複数者でなされたとしても、その録音聞き取りをすべて一人で通して資料とした点も、資料の斉一性という比較研究の至上命令によく応えて至当である。その作図・作表は、なお工夫の余地もあるかもしれないが、克明である。解釈も記述論的立場と地理学的立場とから有機的・合理的になされ、重要な発見が処々に見られる。今後の方言地理学、語アクセント研究の一つの方向を示唆する意欲的実践であり、高い成果である。

#### 四

以上の如く、当著は、単なる『日本語地図』に従属すべき性格を遙かに出で、方言地理学の問題のありかを検し、同時に方言地理学の可能性を多様に掘り起こしている。いわゆる言語地理学は語史再構の学問だという考え方は、もはや狭隘にすぎない。そのような時代は、もはや過ぎ去ろうとしている。

今や、日本の方言地理学も、日本語に即した実践成果を諸種保有するに至つた。今こそ、それに基づきつつ、当学の対象・方法・学

的理念を反省し、内側から真の日本方言地理学を構築していくべき時ではないか。当著にあやかりつつ、共々、ぜひそれに勉めていきたいものである。

（昭和六十年三月発行 三省堂刊 A5判 三九二ページ 九八〇〇円）

——新潟大学教授——

（昭和六十年十二月二十日 受理）